

市川量造の懇願書

1868 年の明治維新は、日本の政治と社会に大きな変化をもたらし、その影響は国内の各城の運命にさえも及んだ。大名が領地を中央政府に明け渡し、現在の都道府県制に改められたのである。

当時、城は歴史保存の対象ではなく、近代国家にふさわしくない時代遅れの戦争のシンボルとして捉えられていた。そのため、多くの城が取り壊され、土地は再利用された。

ここに紹介するのは、市川量造（1844-1908）が松本城保存のために県知事に送った手紙の複製である。民権運動家であり、地方新聞の創刊者でもあった市川は、松本城が競売にかけられ、取り壊されるという知らせに悩んでいた。彼は、城の売却を 10 年以上延期するよう知事に陳情し、大天守で博覧会を開催することを提案した。

一度は却下されたものの、市川は粘り強く陳情し、1873 年により許可された。その年の暮れ、第 1 回目の博覧会が開催された。城内には美術品、工芸品、化石、道具、武器など、さまざまなものが展示された。市川は、「人は 10 年本を読むより、1 日新しいものを見たほうが多くを学ぶ」と考えていた。この考えは正しかったようで、その後 3 年間で、さらに 4 回の展覧会が開催された。